

## はじめに

これまでに、聖書が教える救いには3つの側面があることを学んできました。①義認（過去形）、②聖化（現在進行形）、③栄化（未来形）です。

### 先回のおさらい

クリスチャン生涯には苦難が伴います。しかし、「将来受けることができる栄光に比べればそれは取るに足らない」と誰よりも苦難や患難を経験してきたパウロは記しています。神はまた、これらの苦難を乗り越えるために3つの慰めを備えてくださっています。

①クリスチャンが通過する苦難には意味があります。苦難は、新しい世界を生み出すための「産みの痛み」です。今は被造物も、神の子であるクリスチャンも神に対してうめいています。しかし、このうめきはやがて大きな喜びに変わります。

②クリスチャンには助け主である聖霊が内住してくださっています。この聖霊のとりなしがあります。私たちがどう祈ったらいいかわからない時に聖霊が言葉にならないうめきによって、いつも私たちのためにとりなしてくださいます。

③神の永遠の目的があります。それは、御子が王として、長子として万物を相続し、世界を統治し、御子を信じる者を神の家族として共同相続させるというものです。御子を信じ救われた者であるクリスチャンは、神の摂理の御業によって最終ゴールに導かれています。この驚くべき啓示が私たちに慰めです。

このように神の救いの計画の全貌を明らかにしたパウロは、今イエスキリストによる福音のクライマックスへと昇りつめます。彼が好んで使う修辭的な質問を重ねながら、力強い確信と賛美へと導いていきます。

（修辭的質問とは、答えを期待しない、または必要としないタイプの質問です。読者の共感や反応を呼び起こすための答えのない質問です。）

## 1. 誰がクリスチャンに敵対するのか

8:31 では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょうか。

「では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか」ということばで始まっています。「これらのこと」とは何を指しているのか。文脈を考えると、これは直前の8章の内容だと思われまます。

(1) 私たちは、神の養子とされた (15 節) 「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」

(2) 私たちは、キリストとの共同相続人とされた (17 節) 「子どもであるなら、相続人もあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」

(3) 救いの保証として御霊を受けた (23 節) 「それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだを贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」

(4) 聖霊のとりなしがある (26 節) 「同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。」

(5) 罪の赦しと栄化の保証が与えられている (30 節) 「神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」

全能であり万物の創造者にして審判者である神が、私たちを選び、召し、子とされました。キリストと共同相続人とし、御霊を与え、常に御霊のとりなしがあります。そして将来の栄光が与えられたのなら、いったい誰が私たちに敵対できるのでしょうか、もちろん誰にもできません。

8:32 私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。

パウロは、パリサイ派のラビでした。ここで彼は、「大から小への議論」というラビ的な論法を用いています。大が真理なら、小は自動的に真理となるという論法です。

大は、「神は、ご自分の御子をさえ惜しまれなかった」という個所です。小は「すべてのものを、私たちに恵んでくださる」という個所です。「すべてのもの」とは、被造世界の全てです。つまり、神は御子という最大の犠牲を払われたのだから、それ以下のものを与えてくださらないはずがないというのです。神は、ご自分の御子さえ惜しむことなく十字架の死に渡されました。神はあなたを救うために御子を十字架につけることを惜しまれなかったのです。キリストの十字架における愛こそ私たちの信仰の確信です。

旧約聖書にも神のために惜しまず子をささげた人物がいました。そこでも同じ言葉が使われています。愛するイサクを祭壇に犠牲としてささげようとしたアブラハムに対して神はこういわれました。

**創 22:12 b あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった。**

「惜しむとは」「フェイマドイ」と言い、あるものに執着して、これを犠牲にすることを強くためらうことです。神にとってその一人子を人間の罪のために十字架につけることは、耐えられないほどの苦しみであり、最大の犠牲でした。「死に渡された」とは見放されたという意味であり、神の裁きを表す言葉です。神はあなたのために、御子を惜しまないで裁かれ、見放されたのです。

**マタイ 27:46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」**これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

イエスは十字架上で死に、全人類の罪の身代わりとなり、父なる神と断絶されました。イエスは霊的死を経験してくださいました。それはイエスにとっても、父なる神にとっても苦しみの絶頂であったのです。ここに神の私たちへの絶対の愛があります。神はそれほどまでに私たちを愛しておられるので、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださるのです。

神の永遠の目的は、キリストを長子として私たちクリスチャンに被造世界すべてを共同相続させることです。御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださるのです。これがパウロの論であると同時に、私たちの確信です。

8:33 だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。

訴えるという言葉は「エンカレオウ」といい、未来形の動詞で、法廷用語です。ここでパウロは将来の神の法廷を想定しています。だれが、神に選ばれた者たちを訴えることができるのでしょうか。誰もできません

もしあなたを訴える者がいたとしても、心配する必要はありません。なぜなら、唯一の審判者である神ご自身が、あなたを義と認められており、その訴えは違法な訴えと見なされるからです。あなたは恵みにより、信仰によって無罪判定を受けたのです。

ローマ 3:23-24 すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。

私たちの罪は、過去のものも、現在のものも、未来のものも、すべてキリスト・イエスの贖いのゆえに赦されています。私たちは、奴隷ではなく、自由の子とされました。それゆえ私たちは、今日も明日も、神の愛に応答して生きるのです。

8:34 だれが、私たちが罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていただくのです。

なおもパウロの確信の言葉が続きます。「だれが、私たちが罪ありとするのですか。」これは誰が私たちに有罪の判決を下すことができるのでしょうか。誰もできません。

私たちの罪を帳消しにするために十字架で死んでくださったキリスト・イエスはよみがえられただけでなく、今や神の右の座に就き、偉大な弁護士として私たちのために弁護して下さるからです（「右」とは、同等の権威や力を表しています。）

## 2. 圧倒的な勝利者

8:35 だれが、私たちがキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

パウロの言葉の調子は次第に高くなり、詩となり、歌となり、確信の告白となっています。このキリストの愛とはただ十字架で表された愛だけではなく、現在、聖霊によって私たちのうちに注がれている神の愛です。

どのような迫害も困難も、私たちをキリストの愛から離すことはできません。苦難、苦悩、迫害、飢え、裸、危険、剣。これらの一つ一つを実際にパウロは体験してきました。パウロはこういった迫害や困難の中にあっても、決して挫折することはありませんでした。彼が歴史的にもまれにみる超人的な活躍ができたのは、彼の強さではなく、ただキリストの愛の故だったのです。

8:36 こう書かれています。 **あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。**

実際、パウロをはじめとした初代教会の使徒たち、伝道者たちの生涯は悲惨でした。パウロはその姿を詩編 44：22 を引用して描いています。詩編 44：2 は、主なる神のゆえに迫害と苦難にあっているイスラエル民族をうたった言葉ですが、それをパウロはクリスチャンや伝道者である自分に適応しています。彼らは終日、屠殺される羊のように、誰にも助けを期待することができない絶望的な状態に置かれていました。「見なされています」とは「扱われている」という意味の言葉であり、パウロをはじめとする使徒たち、弟子たちの社会的境遇をよく表しています。

8:37 しかし、これらすべてにおいても、**私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。**

そのような厳しい境遇の中にあっても、キリスト者は圧倒的な勝利者です。私たちを愛してくださった方とは神ご自身です。私たちは、神によって圧倒的な勝利者となっています。現実の境遇によってではなく、私たちを愛しておられる神ご自身によって勝利を得ることができるのです。

「私たちは圧倒的な勝利者です」この言葉は原語のギリシャ語では、「ヒュペルニコモン」といい、一語であらわされています。迫害と悲惨な中であって、私たちは大勝利を得ているのです。**なぜならキリストに結ばれた者は、やがて共同相続人として、必ずその栄光に与るからです。**

神が私たちに下さった約束は、苦難からの解放ではありません。約束の内容をよく見ると「これらすべてのことの中にあっても」とありますので、**これは苦難の中にあって勝利するという約束です。**これがクリスチャン生活の本質です。

「私たちを愛してくださった方によって」とありますので、**勝利の力はキリストから与えられるものです。**「圧倒的な勝利者となる」とありますので、これは、**四苦八苦した辛勝ではなく、圧倒的な勝利です。**ローマ 8：37 の御言葉を自分の宝として、この世に出ていきましょう。クリスチャンは神にあって「圧倒的な勝利者」なのです。

### 3. パウロの確信

8:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、

8:39 高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

この箇所は、これまでパウロが語ってきたことの結論であり、この結論に基づく確信です。パウロはこの確信を、神への爆発的な感謝と賛美の言葉をもって表しています。

この聖句を何度も味わい読むときに、パウロの神への抑えられない感謝と賛美は、自らの信仰と重なり、私自身の感謝と賛美となっていきます。聖書の御言葉、神の御言葉というものは、他のどのような文章とも違い、聖霊によって信仰者の中で植ええられ、育ち、成長していくのです。

38 節、39 節に列挙されている言葉は、すべて美しく対になっています。これによってまるで階段を上っていくように賛美の高見へと向かっていきます。

「死も、いのちも」とあります。死といのちは、どちらもこの世において人間を支配している巨大な原理であり、力です。私たちは、いつどのような時代に、どこでどのような環境で、どのような両親から生まれるのか。何歳まで生き、どのような状態で肉体の死を迎えるのか。死もいのちも人間がコントロールすることができないものです。特に死は最強の敵です。

「御使いたちも、支配者たちも」とあります。これらは天上の霊的な勢力です。良い存在である神の御使い、それに対して悪い存在である悪魔と悪霊たちのことです。また天上の勢力と地上の勢力とも解釈できます。

「今あるものも、後に来るものも」とあります。現在と将来に存在する一切のもの、あらゆる権威と勢力を表しています。

力あるものも、は今現実に力を持っているものたち。この時パウロが考えていたのはローマという帝国とその支配者たちのことでしょう。

「高いところにあるものも、深いところにあるものも」とは、高い天上を支配している勢力も、またどんなに深いハデス（黄泉）を支配している勢力もという意味です。

パウロはこのように一連の対句を使いながら最後にそのほかのどんな被造物も、という言葉でまとめて、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すものは被造世界には何も存在しません、と高らかに宣言しています。

## 最後に

世にはいろいろな宗教がありますが、救いとはAからBに移されることと定義されま  
す。釈迦が説いた原始仏教の救いは「苦から平常心にうつされていること」を指していま  
す。浄土教は「不浄な現世から極楽浄土に移されること」を意味し、新興宗教の多くは  
「貧困から富裕へ移されること」や「病気から健康へ移されること」を救いと呼んでいま  
す。聖書が語る救いとは、枝葉を取り除いてしまえばパスカルが「ハンセ」で言うように  
「神なき悲惨」から「神と共にある至福」へ移されていることを意味しています。

パウロが8章までに語ってきた、福音による救いの3つの要素である義認、聖化、栄化は  
罪によって神から引き離された人類を、神がご自分と共に生きようするために用意し  
てくださった救いのステップです。パウロが確信し高らかに賛美したように、信仰によっ  
てこの救いのステップを進むならば、神の愛から私たちを引きはなすものは、なにもない  
のです。

全人類が有罪であると始まったこの手紙は、深い闇に閉ざされた罪の森を通り抜け、救い  
の階段を一步一步上るようにして、ついにその頂上に達しました。そこに広がる景色は壮  
大なスケールの神の救いのご計画であり、神の愛の光に満ちた世界でした。

これでローマ人への手紙前半が終わりです。9～11章では、イスラエルの救いがテーマ  
になっています。ローマ人への手紙の大きなテーマは、「神の義」と言えます。イスラエ  
ルの救いがまだ成就していないということは、重大な問題につながります。つまり、神の  
義がイスラエルに関しては揺らいでいるということになってしまいます。

そこでパウロは、神の義を弁護するために、イスラエルの救いに言及します。私たち  
は、反ユダヤ的神学の巧みさを見抜き、9～11章の内容を熱心に学ぶ必要があります。12  
～16章は、学んだ真理の適用となっています。パウロ書簡は、教理の後に適用が書かれ  
ています。12～16章で語られるのは、神の義の実践と、神の義の伝達です。